## 川越市立図書館(現中央図書館)の建設にあたって

現在の川越市立中央図書館の建物 (三久保町2番地9) は昭和59年に建設されました。 この図書館ができる以前は、現在やまぶき会館が建っている場所 (郭町1丁目18番地) に旧図書館はありました。

旧図書館が建設されたのは昭和7年です。当時の公共図書館としては先進的な運営方針のもとに設計された建物には、児童閲覧室、婦人閲覧室などが設けられ、多くの方が来館しました。

しかしながら、第二次世界大戦中には陸軍に 館内の一部を貸与したり、戦後は貨幣価値の急 激な下落により、図書館予算がきわめて不十分 となるなど、その運営には、様々な困難を伴う こともありました。

昭和40年代になると人口増加に伴う利用者の増加により、旧図書館では手狭になってしまったことから、新館建設を求める動きが活発になりました。長い議論の末、昭和57年に人口規模に合ったよりよい図書館を建設するという計画



旧図書館

が具体化し、ようやく新館建設に向けて動き出しました。この頃の図書館は、閲覧室にはエアコンもなく、夏は扇風機の風量を最大にしても、うだるような暑さでした。また、書庫の設備は不完全で、資料保存のため常時雨戸を閉めて遮光しており、灯りが少ないためとても暗いといった状況でした。

そして、昭和59年に待望の新図書館が完成しました。同時に、コンピュータシステムを導入したため、約13万冊の資料にバーコードを貼付したり、目録をデータ化する作業を行うなどし、新図書館の開館に備えました。



昭和59年 開館直前の新図書館

新図書館の収容能力は約40万冊です。 建物の完成時には、空っぽの書架が用意し た資料で全て埋まるのかと不安もありまし た。しかしその後書架の増設を行うほど資 料も増え、心配は杞憂に終わりました。

現在では新設された他の図書館とともに 資料を補い合い、広く利用者の要望に応え られるよう努力しています。

これからもより利用しやすい図書館を目指して、日々取り組んで行きたいと考えています。

川越市立図書館では、図書館から遠い地域に住んでいる市民も気軽に本を借りることができるよう、市内各所に配本所を設置したり、移動図書館が巡回したりしていた時代があります。ここでは、昭和50年代以降の配本所、移動図書館事業について紹介しながら、当時の様子を振り返ってみたいと思います。

配本所は図書館のない地域に図書館サービスを提供するために、公民館の一角を利用し、貸出し・返却など基本的なサービスを行っていました。昭和50年12月、霞ケ関北公民館に配本所を設置したのを皮切りに、昭和56年までに市内8箇所の公民館に設置しました。しかし、昭和59年10月に川越市立図書館(現中央図書館)を開館した折に再編成し、3箇所としました。その後平成元年11月、西文化会館に児童コーナーを設置しました。配本所は地域や公民館等との交流もあり、学校帰りの子どもたちが配本所で本を読んで帰るなど、本の貸出し・返却だけではない関わりがありました。

移動図書館は本を載せた自動車で、貸出し・返却などを行い、同じ昭和59年11月に、市内17箇所の駐車場所を回るサービスを開始しました。移動図書館を待っていてくれる利用者のために、ほとんど休止することなく巡回しました。

配本所、移動図書館ともに貸出冊数のピークは昭和60年で、配本所の貸出冊数は年に11万冊、移動図書館の貸出冊数は18万冊を



移動図書館 利用風景

超えました。利用者一人ひとりの要望を把握することができたため、配本所用、移動図書館用の資料として、利用が見込まれる本を優先的に購入することもできました。

しかし、配本所、移動図書館ともに利用者が減っていきます。平成12年から16年の5年間で、約半数の利用者が移動図書館を利用しなくなり、総貸出冊数も2分の1以下になってしまいました。平成14年に西図書館及び川越駅東口図書館を開館し、天候の影響を受けず、より多くの資料を提供できる図書館が利用者の身近に増えたことが、その一因と考えられます。

移動図書館は、自動車そのものがディーゼル車の排出ガス規制の基準に適合しなくなったことに合わせ、平成19年3月に廃止しました。廃車された移動図書館車は、NPO法人南アフリカ初等教育支援の会(SAPESI)によって南アフリカ共和国に寄付されました。

配本所についても、西図書館や高階図書館を開館したことにともない、徐々に廃止し、唯一残っていた霞ケ関北配本所も、平成25年5月にその役割を終えました。